

Coleridge の想像力と空想との区別に与えた

Jean Paul Richter の影響について

山下 登

Samuel Taylor Coleridge (1772—1834) が *Biographia*

Literaria (1817) に於て、Imagination 「想像力」と

Fancy 「空想」とを区別して「想像力」が創造的な芸術創

作の根本的な能力であることを強調したことは文学批評史

上著名な出来事であり、英文学史の言及するところである。

そしてその区別を Coleridge が William Wordsworth

(1770—1850), William Hazlitt (1778—1830), Leigh Hunt

(1784—1890), John Keats (1794—1821), John Ruskin

(1819—1900) など影響を与え、Edgar Allan Poe (1804

—1849), T. E. Hulme (1883—1917), T. S. Eliot (1888—

1965), I. A. Richards (1893—) などをめぐっての区別

が再考され、批判され、現在に至るまで文学批評の論議の

的になって来たことは特筆すべき事実である。^①

さて、これらの文学史の影響関係について述べたことは

控えて、その発生の基である Coleridge の Imagination と

Fancy との区別がどの様な影響の下に出来上ったもので

あるか、特にドイツの Jean Paul Richter の影響につい

て探ってみることにする。

先ずその前に Coleridge はどの様な所説を述べたので

あるのか。Coleridge は *Biographia Literaria* 第四章

に於て、

“fancy and imagination were two distinct and

widely different faculties, instead of being, accord-

ing to the general belief, either two names with

one meaning, or at furthest, the lower and higher degree of one and the same.”^⑤

(「フアンシー (Fancy) とイマジネーション (imagination) とは一般に言せられる様な一つの意味を持つてゐる二つの名称ではなく、或いは更に言せば、一つの同じ力の低い、高くなった程度を持つてゐる名称ではなく、二つの別個の、非常に異なる能力であつた。) と述べ、今迄一般に考えられて来た様に、想像力と空想が程度の差による能力ではなく全く別個の能力であると考えたのである。そして更に *Biographia Literaria* 第十三章に於いて、次の様に述べてゐる。

“The IMAGINATION then, I consider either as primary, or secondary. The primary IMAGINATION I hold to be the living Power and prime Agent of all human Perception, and as a repetition in the finite mind of the eternal act of creation in the infinite I AM. The secondary Imagination I consider as an echo of the former, co-existing with the conscious will, yet still as identical with the primary in the kind of its agency, and differing only in degree, and in the mode of its ope-

ration. It dissolves, diffuses, dissipates, in order to recreate; or where this process is rendered impossible, yet still at all events it struggles to idealize and to unify. It is essentially *vital*, even as all objects (as objects) are essentially fixed and dead.

FANCY, on the contrary, has no other counters to play with, but fixities and definites. The Fancy is indeed no other than a mode of Memory emanicipated from the order of time and space; while it is blended with, and modified by that empirical phenomenon of the will, which we express by the word CHOICE. But equally with the ordinary memory the Fancy must receive all its materials ready made from the law of association.”^⑥

(「それで私は、『想像力』を第一のものとして、或は、第二のものとして考へてゐる。第一の『想像力』は、全人間的知覚の生き生きとした力であり、第一の動因であつて、無限なる自己の中にある永遠の創造的行為を有限なる心のうちに再現するものであると考へる。第二の想像力とは、自覺的な意志を伴つてゐる前者の反響

として、私は考えている。それは、その働きの種類においては第一のものと同じであるが、ただその作用の程度と様式において異なっているだけである。それは再創造するために溶解し、拡充し、拡散するか、あるいはこの過程が不可能にされた場合でも、ともかくそれはいぜんとして理想化し、統一しようと努力する。

丁度、すべての物体が(物として)本質的に固定し、生命を持たないと同様、それは本質的に生命を司るものである。

一方、『空想』とは、固定したものと、有限なるもの以外には、弄ぶべき他の反対物を持たない。空想は、実に時間と空間の秩序から解きはなされた記憶の様式に他ならないのである。その間それは『選択』という言葉によって言い表わされる、意志の経験的現象によって結合され、修正される。しかし空想は普通の記憶と同じくすべて、連想の法則によって用意された素材を受け取らねばならないのである。)

Coleridge は先づ想像力を第一と第二に分け、第一の想像力を一般の人々のものとし、第二の想像力を詩人のものとして区別した。第二の想像力は意識的であると同時に無意識的に働き、第一の想像力より高い活動の程度のもので

あり、様式において異なっているという。そして芸術素材を溶解し、拡充し、拡散して再創造する製作過程を指して謂う名前であるという。空想は時間、空間の秩序から解放された記憶の様式で、連合法則に従って形象が結合されるのであり、想像力と共に芸術創作に必要な能力であるという。

では、Coleridge はこの区別をどの様にして思いついたのであろうか。先ず彼が *Biographia Literaria* 第四章に述べている所を参考にすれば、

“I was in my twenty-fourth year, when I had the happiness of knowing Mr. Wordsworth personally, and while memory lasts, I shall hardly forget the sudden effect produced on my mind, by his recitation of a manuscript poem, which still remains unpublished, but of which the stanza, and tone of style, were the same as those of the “Female Vagrant,” as originally printed in the first volume of the “Lyrical Ballads.” There was here no mark of strained thought, or forced diction, no crowd or turbulence of imagery.Ⓢ(omit)
This excellence,Ⓢ(omit) I no sooner felt, than

I sought to understand. Repeated meditations led me first to suspect, that fancy and imagination were two distinct and widely different faculties, ... (omit) ”

(「幸にも私が Wordsworth 氏と個人的に知り合う様になったのは二十四歳の時であったが私の記憶の続く限り、或る原稿のままの詩を彼が読んでくれた時、それが私の心に及ぼした突如としての影響は恐らく忘れ得ないであろう。その詩は尚未刊のままになっているが、その各聯の文体の調子は最初 Lyrical Ballads の第一巻に収められた Female Vagrant のそれと全く同一のものであった。其処には何等の無理な思想や無理な語法と思われる点はなく、又形象が群り騒々しく混雑を来たしているといふこともなかった。……(中略)

私は彼の詩のこのような特質に感動するや否や、直ちにその何たるかを理解しようとした。反復熟考の結果、先ず私はファンシー (fancy) とイマジネーション (imagination) とは明瞭に、而も甚だしく相違する二つの能力ではなからうかと思ふようになった。』と云っている。これに依ると Coleridge の二十四歳の時

に (Coleridge の二十四歳という言葉をそのまま信用すれば、一七九六年) Wordsworth と知り合う様になったのだが、この時 Wordsworth から Female Vagrant に似た未刊の詩を朗読して聞かされ、非常な感銘を受け、この詩を制作した Wordsworth の能力が何であるかを繰り返し、反覆して考えた結果、想像力と空想という能力を思い付いたと云っている。そして更に Coleridge は続けて、この思い付と意味の弁別とが、

“I had been the first of my countrymen, ...”

(「我が国において私が最初である云々」)

と自負している。しかし筆者はこの点について Coleridge が誰からも影響を受けずにこの想像力と空想との区別を思い付いたとは考えることが出来ない。半ば独創であり、半ば影響模倣によると考えられる。Biographia Literaria の編集者 J. Shawcross は一九〇七年にこの言葉に注を施して、

“the belief that I had been the first of my countrymen. It does not appear that any stress is to be laid on the words ‘of my countrymen’ in this sentence. I cannot discover that Coleridge was indebted to any other mind (except in a cer-

tain degree, to Wordsworth's) for the distinction of fancy and imagination as it is at first occurred to him. The German words 'Phantasie' and 'Einbildungskraft' have never, so far as I can find, been definitely appropriated to these respective meanings, and either of them may still be used indifferently to express Coleridge's 'imagination', although 'Einbildungskraft' could hardly bear the sense of 'fancy'. The distinction made by Jean Paul in his *Aesthetik* between 'Einbildungskraft' and 'Phantasie' (according to which the former is a 'potentiated brightly-coloured memory', whereas the latter is the power of 'making all parts into a whole') certainly recalls Coleridge's distinction: but it is impossible that he is in any way indebted to J. Paul, whose *Aesthetik*, even in 1817, he had 'but merely looked into.' And for Coleridge it was always the word 'Einbildungskraft' which denoted the higher faculty.^⑥

(『我が国で私が最初の者であつたところの信念』)

の文中の『我が国で』(英国で)という言葉に何らかの強調を置く必要があるとは考えられなう。Coleridge が imagination と fancy との區別を最初に思いついた時(或る程度 Wordsworth のものを除く)誰かに負つていたところを私は見出すことが出来なう。ドイツ語の Phantasie と Einbildungskraft という語は私の見る限りでは (Coleridge の fancy と imagination と同う) どれも個々の意味にはあまり充ちあつたこととはなかつた。Einbildungskraft とは Coleridge の fancy の意味を殆ど持たせられ、出来なうけれど Phantasie は Einbildungskraft の語の) それらの二つとも漠然と Coleridge の imagination を表現するのに用ゐることが出来ると云ふ。Jean Paul の *Aesthetik* に於ける Einbildungskraft と Phantasie との區別(即ち Einbildungskraft は『可能性を帯びた潑刺たる記憶』の意で、Phantasie は『各部を全一に統合する力』の意)は Coleridge の區別を確かに想わせる。然し Coleridge が Jean Paul に何らか負つてゐるところがあつたところを私は不能である。彼は一八一七年におつては *Aesthetik* を『ほんの一寸のどいた丈』であつたから。そして

Coleridge についてはより高い能力を示していたのは常に Einbildungskraft の語の方であった。』)

と述べた。これに依るに Coleridge は Imagination と Fancy との区別を Wordsworth を除いては他の誰からも影響を受けて居らず、Coleridge の全くの独創であり、ドインの Jean Paul の Einbildungskraft と Phantasie との区別を想わせるが、Coleridge は Imagination と Fancy の区別が載っていない *Biographia Literaria* を出版した一八一七年に於いては Jean Paul の *Aesthetik* を「ほんの一寸のどいた丈け」であるから、Jean Paul は Phantasie (構想する能力) を最高の能力とし、Einbildungskraft (記憶を扱う能力) と見做すに對して、Coleridge は Imagination (構想する能力) を最高の能力となし、Fancy (記憶を扱う能力) と区別するのである。語源の上ではドイツ語の Phantasie には英語の Fancy が、Einbildungskraft には Imagination が相当するから間違い易いが、Jean Paul の Phantasie と Einbildungskraft との区別と Coleridge の Imagination と Fancy との区別は言葉と意味の弁別が逆さに組み変っているから Coleridge は Jean Paul から影響を受けていないと J. Shawcross は云っているのである。又我が国の桂田利吉博士

も一九四九年(昭和二四年)に Coleridge の *Biographia Literaria* (「文学評伝」を翻譯され、その脚注に於いて先に乗げた J. Shawcross の説を支持され、『想像力』と『空想』との区別を立てたのは全く Coleridge の創見である。』と述べられ、更に又その卷末論文「芸術創作の根本的能力としての想像力説」において、又昭和三十五年の桂田利吉氏の博士論文「コウルリッジ研究」において、又最近出版された「コウルリッジ研究」(一九六九年)に於いて、

「この区別は、ショウクロッスも指摘しているように、全くコウルリッジの独創的見解に基づくものである。従来この区別については、彼はリヒター (Jean Paul Richter) の『美学入門』(*Die Vorlesungen über Aesthetik*, 1804—12) 中の Einbildungskraft と Phantasie との区別に暗示を得たものである。(*The History of English Literary Criticism* の著者 ウェイリー——Wylie——はその代表的なものである。この説があるが、それは単なる臆説に過ぎない。なぜならば、リヒターの場合は、両者の区別は全く反對、すなわち Phantasie (fancy) を以て芸術創作の最高能力とし、Einbildungskraft (imagination) を却

つて芸術以前の能力として考えているばかりでなく、
コウルリッジは『文学評伝』出版の年、すなわち一八
一七年です。『美学入門』については殆ど瞥見した程
度の知識しかなかった。かつ彼は同書のことについて
は、『文献中殆どどこにも述べている所がない』^⑧
と述べておられる。又故佐藤清教授も

「Fancy と Imagination の 区別を 立 つ た じ つ と は Cole-
ridge の 創見 である ことは 明らか だ。勿論 Wordsworth
に 負 う 所 多 きは 言 を 俟 た ぬ が、独 語 の Phantasie
と Einbildungskraft と いう 語 は まだ 当時 明確 な 区別
を 立 て て 考 え ら れ て は い な かつ た。こ の 両 語 に 関 し
つ、Jean Paul が 下 し た 区別 (前者 を potentiated
brightly-coloured memory と し、後 者 を power of
'making all parts into a whole' と し) は Col-
ridge の 説 を 想 わ せ る が、Coleridge は Paul に 負 う
所 は 少 し も な かつ。 (Shawcross 参 照)」

と述べておられる。ところで佐藤清教授の Phantasie と
Einbildungskraft に関して言われる先の文中の「前者」
と「後者の」は Phantasie の「phantasy」potentiated brightly-
coloured memory を指し、「後者」とは Einbild-
ungskraft の「phantasy」power of 'making all parts

into a whole' を指すと考えられるが、これは間違いで、
Einbildungskraft' 即ち potentiated brightly-coloured
memory であり、Phantasie' 即ち power of 'making
all parts into a whole' を指しているのである。それに
しても、筆者は J. Shawcross や桂田利吉博士や佐藤清教
授の様に考えることが出来ない。筆者は先ず Pearsall
Logan Smith (1865—1946) のこれについての見解を思い
出さねばならぬ。

“Brandl, in his *Life of Coleridge*, says that
Coleridge derived the distinction he made be-
tween Genius and Talent from his reading of Jean
Paul Richter; and that also the famous distinction
between Fancy and “higher and creative” faculty
of Imagination was derived from the same source
(Brandl, English translation, p. 316)”

(「Brandl はその著 *Life of Coleridge* に於いて、
Coleridge が Genius (天才) と Talent (才能) と
の間に立った区別を Jean Paul Richter の著述の読
書からその源泉を得ている。そして又 Fancy と
Imagination との間『より高次のそして創造的な』能
力との間の有名な区別も同じ源泉からその資料を得て

らる (Brandle 英語訳 p. 316) と述べている。』)

Pearsall Logan Smith の言へ Brandl とはヘンソンの英語英文学者 Alois Brandl (1885—1940) のハンブルグの著述『*Life of Coleridge*』とは Samuel Taylor Coleridge und die englische Romantik (1886) のハンブルグ Brandl は Coleridge 研究では高く評価すべき碩学でもあった。Samuel Taylor Coleridge und die englische Romantik は一八八七年イギリス人 Lady Eastlake により英訳された『*Life of Coleridge*』と翻譯された。Logan Smith は Eastlake の英語訳より引用している。又 Laura Johnson Wylie (アメリカ人) は Yale 大学に出した学位論文『*Studies in the Evolution of English Criticism*』の中の Samuel Taylor Coleridge の項目で Brandl の語を交絡して

“His criticisms shows everywhere the traces of Richter’s influence. Not only did he draw from *Die Vorschule der Aesthetik* (1804—1812) such fundamental ideas as the distinction between imagination and fancy, but ….”

(「彼 (Coleridge) の批評はあらゆる処で Richter の影響を示している。彼は *Die Vorschule der Aes-*

thetik (1804—1812) から想像力と空想の区別の如き基本的な考えを引いているのみならず云々。』)

と述べている。又筆者が René Wellek が『*A History of Modern Criticism* (1955) 第六章 “Coleridge”』と述べた言葉を思ふ出されたはなるが。

“The manuscript notes for the lecture on “Wit and Humour” are a patchwork of quotations from Jean Paul’s *Vorschule*.”

(Coleridge の『機智と諧謔』) と同じの講義は Jean Paul の *Vorschule* からの引用の寄せ集め細工である。』)

René Wellek 自身の Coleridge の「機智と諧謔」と同じの原稿が T. M. Rayson の *Coleridge’s Miscellaneous Criticism* (London, 1936) に載っている。これは *Coleridge’s Miscellaneous Criticism* の Coleridge の “Wit and Humour” に Jean Paul Richter の *Aesthetik* 中の「機智と諧謔」への比較と同じく又の機会に譲るべきである。唯、これによって Coleridge が Jean Paul の *Aesthetik* を精読していたことだけは確かである。従って先に引用した様に桂田利吉博士が Coleridge が Jean Paul

⑥ *Die Vorschule der Aesthetik* の中に就いては彼の文献中殆ど何処にも述べているところがないという意味のことを述べられたが、これは間違である。さて、それでは Coleridge は Jean Paul の *Aesthetik* を何年頃に読んでいたのであろうか。それを調べる手懸として J. Shawcross の *Biographia Literaria* の *Notes* に戻ることにしよう。J. Shawcross は *Biographia Literaria* の *Notes* にきまつ、先に述べた様じ

「彼 (Coleridge) が Jean Paul に何か負っていることがあったらどういふかは不可能である。彼は一八一七年にきまつてゐる *Aesthetik* は『ほんの一寸のざつた丈け』であつたから」

と述べてゐるが、この文中の *Aesthetik* を「ほんの一寸のざつた丈け」といふ言葉は Coleridge が一八一七年一月一三日付の J. H. Green 氏宛の手紙の中で述べた言葉である。

“I have but merely looked into Jean Paul's *Vorschule d. Aisthetic*; but I found one sentence almost word for word the same as one written by myself in a fragment of an *Essay on the Supernatural many years ago.*”

(「私は Jean Paul の *Vorschule d. Aisthetic* をほんの一寸のどいたに過ぎない。しかし私は私が数年前に超自然についての論文^⑦の中で書いた一文と殆ど逐語逐語同じ文を *Vorschule d. Aisthetic* の中に見出した。」)

J. Shawcross は Coleridge の一八一七年の J. H. Green 氏宛の手紙を根拠に Coleridge の *Biographia Literaria* に対する Jean Paul の *Vorschule der Aesthetik* からの影響が無いと断定したのは少しく早計ではなかつたらうか。J. Shawcross が *Biographia Literaria* を編集したのが一九〇七年であり、Jean Paul の Coleridge への影響説を最初に唱えた Alois Brandl の *Samuel Taylor Coleridge und die englische Romantik* が出版されたのが一八八六年であつてみれば、これに反対し、Coleridge の *Imagination* と *Fancy* との区別が独創であることを見護するために J. Shawcross は先に挙げた *Biographia Literaria* の Coleridge の *Imagination* と *Fancy* との区別が Jean Paul の *Phantasie* と *Einbildungskraft* との区別から影響を受けていないという脚注を付けたのではなかつたらうか。一九〇七年と言へば、世界状況においては、一八八三年に締結された独逸伊の三国同盟に対抗して、

英仏露が三国協商を結んだ年である。この二大プロットの対立がやがて第一次大戦へと持ち越されることになるわけだが、従って、一九〇七年は以前から次第に險悪化しつつあったイギリスとドイツが決定的な対立を生んだ年なのである。ドイツの Alois Brandl によつて Jean Paul の Coleridge への影響説を通し、学問の上で英国人 J. Shawcross の心に英国を思ふ国民的矜持が働いたのかも知れない。それによつて J. Shawcross が Coleridge の一八一七年の J. H. Green 氏宛の書簡にも「*Vorschule d. Aesthetic* をほんの一冊のぶいた丈であつた」といふ言葉から Jean Paul の Coleridge への影響が無いと考へたのは少し心細い理由に頼つていふと言ふべきであらう。Coleridge が一八一七年に Jean Paul の *Vorschule der Aesthetic* を見ていたのなら、彼がそれ以前に影響を受ける可能性はなかつたであらうか。新しい資料によると、Coleridge は早くから Jean Paul の名を知つていたのである。E. L. Griggs 編集の *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* (1959) に依るに、Coleridge は一八一二年三月一二日付の Henry Crabb Robinson 宛の手紙の中で、初めて Jean Paul の名を挙げてゐる。

“It has just come into my head, that this Scrawl

is very much in the Style of Jeal Paul. I have not however as yet looked into the Books, you were so kind as to leave with me—further than to see the Title page. If you do not want it, for some time, I should be glad to keep it by me—while I read the original works themselves—I pray you, procure them for me—work by work—and I will promise you most carefully to return them, you allowing me three days for two volumes.”

(「こんな走り書きが Jean Paul の表現法に非常に多いのを今ふと思ひ付きました。御了解頂けると思いますが、私はその選集の表題を見ただけで、中をまだのぞいてはいないのです。貴方がお入用でなかつたら、私が元本を読む間、少しの間、私にそれを貸していただけると有難いのですが、どうか次々と元本が私の手に入る様にして下さい。そうすれば、二巻で三日間下されば、非常に注意してそれをお返しすることをお約束します。」)

これでみると、一八一一年に Coleridge が Crabb Robinson の持つてゐる Jean Paul の選集を借りたが、

つること、又 Crabb Robinson から借りる事が出来た元本を Crabb Robinson の持っているその選集とを比較照合したいと思つてゐる事が知られる。

E. L. Griggs はこの手紙に注を施して、Jean Paul の選集というのは恐らく Robinson がドイツから持ち帰つたと考えられる *Jean Paul Geist* (2 vols, 1801) 「ジャン・パウル名句集」の事をいふのであらうと推定を下してゐる。現在の *Jean Paul Geist* は Dr. Williams Library に Coleridge 自筆の注釈が付いて残つてゐる。又先に挙げた手紙に付けられた Griggs の注に依ると Coleridge はこの外、Jean Paul の *Das Kampaner Thal* (2 vols, 1797) 「靈魂の不滅について」*Palingenesien* (1798) 「新生」*Museum* (1814) 「美術館」等に注釈を施したと述べてゐる。Coleridge の注釈の付いてゐる *Das Kampaner Thal* は現在アメリカの Princeton 大学に *Palingenesien* は所在不明、*Museum* はイギリスの Dr. Williams Library に所蔵されてゐることを付記しておく。又 Coleridge は一八一三年十一月二十六日付の前記と同じ Henry Crabb Robinson 宛の手紙の中で、

“To tell the truth, I should be glad to exchange with you almost any of my Books (metaphysics

excepted) for the Selections from J. J. Richter—
I could explain to you my motive if I were with you—”

(「本当のことを言ひますと、私は貴方の持つて居られる J. J. Richter の選集と私の持つて居る書物の中、(形而上学を除く) 殆どどんな書物とでも交換して下されば嬉しいのですが——私が若し貴方と一緒にしたら、私の動機を御説明申し上げるのですが。)」と述べてゐる。これら二通の手紙によつて Coleridge が一八一一年頃から Jean Paul に特別の関心を払つていたことが窺える。従つて、一八〇四年に Hamburg 大学から出版された Jean Paul の *Vorschule der Aesthetik* の書物の名を Coleridge は一八一一年頃には知つていたであらうし、又何ぞかの径路を經つて *Vorschule der Aesthetik* の内容についてあらかじめ知つていた様に考えられる。

と云うのは、一八一一年一月一八日より一八二二年一月二七日にかけて London Philosophic Society で Coleridge が行った「シェクスピア及びミルトン論」と題する講演、その第四講において、次の様に述べてゐる。

“He might have talent, and a good education,

and yet have mistaken (perhaps, for his own interest, wisely) an intense desire for poetic reputation for a natural genius and poetic powers. He might mistake, as we all too often did, the strong thirst for the end, for a natural capability of the means.

That gift of true Imagination, that capability of reducing a multitude into unity of effect, or by strong passion to modify series of thoughts into one predominant thought or feeling—those were faculties which might be cultivated and improved, but could not be acquired. Only such a man as possessed them deserved the title of *poeta who nascitur non fit*—he was that child of Nature, and not the creature of his own efforts. (「」の様な人は(詩人ではない人)は才能(talent)や立派な教育を持っているかも知れない。而も(恐らく、賢明にも、彼自身の利益のために)詩的名声を得たいという強烈な願望と自然な天才(genius)と詩的能力とを誤っているのである。彼は我々全てが余りにも屢々する様に、目的に対する強烈な渴望と手段とい

う自然な能力とを誤っているのかも知れない。

眞の想像力(Imagination)のあの天賦の能力、多数を効果の統一に減ずる能力、強い情熱によって、一連の思想を一つの有力な思想や感情に改変する能力—それらは培われ、改良されることは出来るかも知れないが、修得されることは出来ない能力であった。それらを所有している人のみが、生れるものであって、作られるものにあらずという詩人の名に価するものであった。—彼は自然の子にして彼自身の努力の創造物ではなかった。』

と述べて、「才能」(talent)と「天才」(genius)とを區別し、天才に相応ずる能力として想像力(Imagination)を挙げている。

又第三講に於て

“This, again, united with a more than ordinary activity of mind in general, but more particularly of those faculties of the mind we class under the names of fancy and imagination—faculties (I know not how I shall make myself intelligible) that are rather spontaneous than voluntary.”

(「これ(眞の詩人という觀念)は再び、一般に普通

以上の心の活動、特に我々がファンシー(Fancy)とい
マシネション (Imagination) という名の下に区別
している心のそういう能力の活動——(私は私自身如
何に解りやすいものにするべきであるか知らないが)
意志的であるより自然発生的である能力の活動と結合
していた。』)

と述べて、一八一二年一月一日より一八一二年一月二
七日の間の講演において、想像力と空想とを区別すべき
ことを説いている。ここで先に述べた如く、Pearsall Logan
Smith が引用した Alois Brandl の talent と genius の
区別のみならず imagination と fancy の区別を Jean
Paul Richter の読書からその源泉を得ているという意味
の言葉を思い起さねばならない。「天才」と「才能」の区
別のみならず、「想像力」と「空想」の区別まで、Jean
Paul のものと Coleridge のものが似ていることは偶然の
一致によるものとは考えられない。筆者は恐らく Jean
Paul Richter の Coleridge への影響と考えることが出来
る。それに Coleridge は又一八一六年七月四日付の John
Murry 氏宛の手紙の中で、

“Jean Paul Richter would supply two or three
delightful Articles.”

(「Jean Paul Richter は二つ三つの実に喜ばしい論
文の記事を提供するであろう。」)

とも云っているのである。この「二つ三つの実に喜ばしい
論文の記事」という言葉は何であったか知る由もないが、
推理を逞しゅうすれば、Coleridge が Jean Paul Richter
の論文の記事を読んで実に喜んだものと言えば、Jean
Paul の *Vorschule der Aesthetik* における第一部、想像
力と空想の区別、天才と才能の区別、それに先に述べた第
三部、機智と諧謔の項目を含んでいる論文だったかも知れ
ない。しかしそれは臆測に過ぎない。しかし Coleridge が
一八一一年頃から一八一七年頃までに、即ち *Biographia
Literaria* が出版される時頃まで、Jean Paul Richter
の *Vorschule der Aesthetik* を読んでしまっていた様
に考えられる。*Biographia Literaria* はその第十三章
に想像力と空想の区別を含んでいるのみならず、その第二
章には「天才」と「才能」の区別を含んでいるのである。
従って一八一七年に出版された Coleridge の *Biographia
Literaria* の Imagination と Fancy との区別が Jean
Paul Richter の一八〇四年に出版された *Vorschule der
Aesthetik* からの影響を受ける可能性が充分あったと考
えられる。又後で調べたところであるが、Alois Brandl は

*Samuel Taylor Coleridge und die englische Roman-
tik* ひげらび

“That he was then well acquainted with the ‘Vorschule’ is shown by a remark made to Robinson, 29th January, 1811, that the fools played the same part towards Shakespeare’s plays as Chorus did in the old Greek tragedies; for Jean Paul makes the same remark; and the same idea can hardly have occurred independently to two different men. But what he especially gathered from the ‘Vorschule’ was the distinction between the power of conception in the “lower sense, which is fancy, and that in the higher and creative sense, which is imagination.”

(「彼 (Coleridge) がその場合 ‘Vorschule’ をよく知っていたといふことは古いギリシヤ悲劇において、合唱が為した様に、シェクスピアの劇のために道化が同じ役割を演じていたといふ一八一一年一月二十九日のロビンソンに対して為された評言によって示されている。同じうのはジャン・パウは同じ評言をしてゐる。そして同じ考えが二人の異なった人に独立に起つ

たといふことは殆どあり得ない。彼が *Vorschule* から集めたものは「空想であるより低い意味」における概念の能力と「想像力であるより高い創造的な意味」における概念の能力との区別であった。)

と述べてゐる。筆者は一八一一年一月二十九日のロビンソンに対する Coleridge の評言を手に入れていないけれども、一八一一年頃に Coleridge が Jean Paul の *Vorschule der Aesthetik* を読んでゐたといふことは、これによつてほぼ決定的であると言つて可い。

では Jean Paul の *Vorschule der Aesthetik* は如何なる内容をもつてゐるのか。それは Leipzig 大学における公開講演録であつたが、Jean Paul はその第一章「Stufenfolge poetischer Kräfte」[詩作能力の等級] に於て、Einbildungskraft と Phantasie とを區別して、次の様に述べてゐる。

“Einbildungskraft

Einbildungskraft ist die Prose der Bildungskraft oder Phantasie. Sie ist nichts als eine potenzierte hellfarbigere Erinnerung, welche auch die Thiere haben, weil sie träumen und weil sie fürchten. Ihre Bilder sind nur zugeflogne Abblatterungen

von der wirklichen Welt; Fieber, Nervenschwäche, Getränke können die Bilder so verdicken und betreiben, daß sie aus der innern Welt in die äußere treten und darin zu Seibern erstären.

Bildungskraft oder Phantasie

Aber etwas Höheres ist die Phantasie oder Bildungskraft, sie ist die Welt; Seele der Seele und der Elementargeist der übrigen Kräfte; darum kann eine große Phantasie zwar in die Richtungen einzelne Kräfte, z. B. des Witz, des Scharfsinns u. f. w. abgegraben und abgeleitet werden, aber keine dieser Kräfte lässt sich zur Phantasie erweitern. Wenn der Witz das spielende Anagramm der Natur ist: so ist die Phantasie das Hieroglyphen Alphabet der selben, wovon sie mit wenigen Bildern ausgesprochen wird. Die Phantasie macht alle Theile zu Ganzen——statt daß die übrigen Kräfte und die Erfahrung aus dem Natur-buche nur Blätter reißen——und alle Weltheile zu Wellen. sie totalisierte alles, auch das unendliche All;”

(「Einbildungskraft

EinbildungskraftはBildungskraft或いはPhantasieの散文である。それは動物が夢をみたり、恐れたりするが故に、動物も又所有する有力な潑刺たる記憶以外何物でもなし。

Einbildungskraftの形象は現実の世界から飛びゆく落葉に過ぎない。熱病者や神経衰弱者や酒飲家が内的世界から外的世界に歩み、その中で凍死する程にこれらの形象を色濃く、鮮かにすることが出来る。

Bildungskraft 或いは Phantasie

しかしより、高次のものは Phantasie 或いは Bildungskraft である。それは世界である。霊の霊である。その他の能力の元素精霊の如きものである。それ故に偉大なる Phantasie は実に個々の能力、例えば、機智、明察等の能力に向つて掘り下げ、導くことが出来る。機智が天然の遊技的な字母の転置であるなら、Phantasie は僅かの形象を以て表現し得る天然の象形文字である。Phantasie はあらゆる部分を全一なものとする。——その他の能力や経験が天然の書物から唯花卉をひきちぎるに過ぎないのに対して、——そしてあらゆる世界の部分を世界へ、それはあらゆるものを全体に統一する。又無限の全一に統合する。)

Jean Paul は Einbildungskraft が動物やあらゆる人間の持てる有力な鮮かな記憶を扱うものであり、芸術製作の上で欠くことの出来ぬものであり、それに対して Phantasie は Einbildungskraft より一段と高次のものであり、それは世界であり、霊の中の霊であり、芸術の世界に君臨して、あらゆるものを無限に統一し、全一化してやまない全能者であり、理性によって深い認識に達する構想力であると言ふ。これは Coleridge の *Biographia Literaria* 第十三章の Imagination と Fancy との區別を我々に彷彿とさせるものがある。

「Imagination (想像力) は再創造するために (素材を) 溶解し、拡散し、消散させる。或いは何としても理想化し、統一化せんと努力する。それは本質的に生きているものであり、丁度あらゆる対象が対象としては本質的に固定し、死んでいるように。」

それに対し、Fancy (空想) は固定したもののや有限なもの以外にその他の遊び相手を持たない。Fancy は実際時間と空間の秩序から解放された記憶の様式に過ぎなく^⑧。」

この様に Jean Paul と Coleridge との文章を比較して見る時、Jean Paul に比べて Phantasie が Einbild-

ngskraft より一段高い能力であり、Coleridge は Imagination が Fancy より高い能力とし、Jean Paul が Einbildungskraft を記憶を扱うものとするに反して、Coleridge は Fancy が記憶を扱うものとする。又 Jean Paul は Phantasie が「無限の全一に統合する」に反して、Coleridge は Imagination が「何としても理想化し、統一化せんと努力する」と述べる点において似ているところが出て来る。R.L. Brett は *Fancy and Imagination* (1970) の中で、

「この一節 (*Biographia Literaria* 第十三章の想像力の定義) において、実際に彼が語っているのは、詩的想像力は『觀念化』と『統合化』にむかって努力する」ということ——それだけである。」

と述べているが、ここで『觀念化』と訳されているのは兒玉実英氏の訳であるが、「理想化」とも訳せるが、この Coleridge の「何としても理想化し、統一化せんと努力する」という言葉は Jean Paul の *Vorschule* に由来する様に考えられる。さて、Coleridge は Jean Paul から影響なくこれらの文章を書いたのであるか。若し影響なく同じ考えを述べたものであるとすれば時代精神が天才の頭脳の人に同じ考えを孕ませた一例として、文化史におけ

る、或いは人類学における注目すべき思考の類同として捕えることが出来る。しかし筆者は影響によつたものと考えている。猶兩者を比較してみても、注意すべきことは Coleridge が Imagination と呼んでゐるものは Jean Paul に於ては Phantasia と相対し、Coleridge の Fancy は Jean Paul の Einbildungskraft に相当するといふ。桂田利吉氏や佐藤清氏は *Biographia Literaria* に付けられた J. Shawcross の脚注

“The distinction made by Jean Paul in his *Aesthetic* between ‘Einbildungskraft’ and ‘Phantasia’ (according to which the former is ‘a potentiated brightly-coloured memory’, whereas the latter is the power of ‘making all parts into a whole’ certainly recalls Coleridge’s distinction.” を意識されて、桂田利吉教授は

『ジャン・パウル (Jean Paul) の『美学』』の中の『空想』(Phantasia) と『構想力』との相違 (即ち『空想』は『可能性を帯びた潑刺たる記憶』の意で『構想力』は『各部を全一に統合する力』の意) はロウルリッジの区別を確かに想はせる。」

と訳されている。しかしこれは間違つて、Phantasia は

「可能性を帯びた潑刺たる記憶」ではなく、「各部を全一に統合する力」である。そして Einbildungskraft が「可能性を帯びた潑刺たる記憶」である。又佐藤清教授も同様に誤られたことは先に述べた。恐らく佐藤清氏が J. Shawcross 編の *Biographia Literaria* の注解を研究社から昭和三年に出され、桂田利吉氏は昭和二十四年に「文学評伝」を翻譯され、「佐藤清先生編の研究社英文学叢書中の同書 (*Biographia Literaria*) を参照した」と述べてゐられるから、佐藤清教授が誤られたから、同様に桂田利吉氏も誤られたのであらう。それに対して、山川鴻三氏の「近代英文学における二つの批評の伝統」(一九六九年)の脚注におこつて、

「ロウルリッジが一時その影響をうけたといわれる Richer の『輝かしく色づけられた記憶力』としての Einbildungskraft と創造し統一する力としての Phantasia の区別は云々」

という言葉は當を得ている。しかしここで注意すべきことは語源の上で、桂田利吉氏や佐藤清氏が間違われた様に Phantasia には Fancy が、Einbildungskraft には Imagination が相当するといふ。Coleridge は言葉と表現内容とを Jean Paul のものとは逆に組み変えて、換

骨奪胎しているのであるが、Coleridge の美意識が無意識の中にそうさせたのかも知れない。恐らく彼は当時阿片を服用していたから、阿片の作用によって、半ば意識的に、半ば無意識の中に行つたのかも知れない。又 Hobbes や Addison の Imagination と Fancy の區別^⑤から Imagination を重しと見る英国の伝統的とも言える考えに傾いたのであらう。それにしても Coleridge の頭腦の働きは、この様に言語形式と内容、言葉と意味、表象と意味内容を置き変えることが出来た非常に特異な頭腦であつたと考えられる。この作用の又の名を潜在意識を操作する想像力の作用と言つてもよいかも知れない。The Road to Xanadu, A Study by the Ways of the Imagination (1927) の著者 Livingston Lowes (1867——) 教授が指摘してゐる様に Coleridge は “The Rime of the Ancient Mariner” (1798) 「老水夫行」を創作した時、彼は英国から当時外国に出たことはなかつたのに、南極の真白な氷のくずれる凄まじい光景を真迫的な詩として定着させることに成功したが、それは彼が当時頻繁に行われた北極海の探検記^⑥例^⑦ Thomas James の *Strange and Dangerous Voyage* や Martens Fredrick の *Voyage into Spitzbergen and Greenland* などを讀書する中、それ

らに出てくる語句を無意識の中に記憶し、そしてそれらを駆使して、詩を創作したが、その時、探検記の様に北極海ではなく南極海の氷のくずれる様を歌うのに応用した。又同じ “The Ancient Mariner” に於ける詩句

“The sun now rose upon the right :

/Out of the sea came he,

/Still hid in mist, and on the left

/Went down into the sea.

(「太陽は今や右手に登れり。

猶霧立ちこめたる海から

登り出で、左手にあたり

太陽は海の中に沈みけり。』)

は中世時代の老水夫がアメリカ大陸を船で迂回したことを示す語句として用いたのであつたが、これは実はヘロドトスの「史記」に記されていた語句であり、古代のフェニキア人達がアフリカ大陸の海岸線を船で迂回した時、海岸線に沿って行くことやがて船の舷が回転しているのを知らずして、太陽が西から出て東に沈んだと錯覚して、驚き、地の果の不思議な現象であると考え、帰国した時、ヘロドトスにその現象を報告し、ヘロドトスは地の果の不思議な出来事として、「史記」に記録したのであつたが、Coleridge

はこの「史記」を読んでいて、中世の老水夫の船がアメリカ大陸ではなくて、アメリカ大陸の半島の海岸線を迂回したことを示す語句として、先の詩を作ったのである。こうした例によって解る様に、Coleridge の頭脳は潜在意識を駆使し、それらを換骨奪胎して、逆に組み変えることが出来たのだが、Imagination と Fancy との区別も Jean Paul の Phantasie と Einbildungskraft との区別を逆に組み変えて、使用したものではなからうか。その限りにおいて Coleridge の想像力と空想の区別は独創的である。

(本学助教、西洋文学)

註

- ① Samuel Taylor Coleridge の想像力と空想との区別の浪漫派詩人達、批評家達などに与えた影響、現在の想像力と空想との区別についての考え方の一側面については拙稿「Samuel Taylor Coleridge の想像力と空想力との区別にめぐっての一考察」(『大谷学報』第四八巻第二号、昭和四三年一〇月三〇日発行)を参照された。
- ② Samuel Taylor Coleridge の想像力と空想との区別に与えた影響にめぐっては、拙稿「S. T. Coleridge の『想像力』と『空想力』との区別に与えた影響にめぐって」(『英文学試論』第二号、昭和四四年一月一日発行)を参照された。
- ③ *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross, Oxford, 1954, Vol. I, pp. 60—1.
- ④ *Ibid.*, p. 202.

- ⑤ *Ibid.*, p. 58.
- ⑥ *Ibid.*, p. 60.
- ⑦ Coleridge 二十四歳の時と云うと、Coleridge は一七七一年十月二十一日生れであるから、一七九六年である。「幸にも私が Wordsworth 氏と個人的に知り合う様になったのは二十四歳の時云々」と言っているが、これは多分 Wordsworth との二度目の会見の時であろう。Wordsworth との第一回目の会見は一七九五年の九月であったことが、J. Shawcross による定説になっている。従って Coleridge が Wordsworth に始めて会ったのは二十三歳の時であらう。第二回目は一七九六年の秋となっている。従って Coleridge が *Biographia Literaria* の中で Wordsworth と知り合ったことになったと云うのは二回目の会見の時であらう。Coleridge は一八一五年頃には (*Biographia Literaria* 執筆の当時) 阿片を飲んでいたので良く覚え間違をしたのではなかろうか。(*Biographia Literaria*, J. Shawcross' Edition, Notes, pp. 223—4.)
- ⑧ *Female Vagrant* 「放浪する女」によく似た詩と云うのは *An Adventure on Salisbury Plain* 「ソールズベリー平原での冒険」と云う詩のことで、現在は残っていない。
- ⑨ *Biographia Literaria*, Vol. I, p. 63.
- ⑩ *Ibid.*, Vol. I, Notes, p. 226.
- ⑪ 「文学評伝」桂田利吉訳(思索社、一九四九年)脚注、p. 398.
- ⑫ 「コウルリッジ研究」(法政大学出版局、一九六九年) p. 339. 桂田利吉氏の博士論文、「コウルリッジ研究」は国会図書館に所蔵されている。頁数は打たれていない。筆者の引用している所は、「文学評伝」の巻末論文、「芸術創作の根本的能力としての想像力説」(『文学評伝』p. 472)と同一の文

- 章 シヤウシヤウ。
- ⑮ Coleridge, S. T., *Biographia Literaria*. 注釋者 佐藤 清 (研究社, 昭和三年十一月) 脚注' p. 213.
- ⑯ Pearsall Logan Smith, *Four Romantic Words* (Constable, 1948) p. 111—2.
- ⑰ Laura Johnson Wylie, *Studies in the Evolution of English Criticism*, 1894, p. 180.
- ⑱ René Wellek, *A History of Modern Criticism: 1750—1950, The Romantic Age* (Jonathan Cape, 1955), p. 153.
- ⑲ *Ibid.*, Notes, No. 12, p. 390.
- ⑳ Jean Paul Richter の *Aesthetik* に於ては筆者の書くところを以て「機智 シヤウシヤウ」と見出しをなす。誰 シヤウシヤウ べし VIII. *Programm. Über den epischen, dramatischen und lyrischen Humor* Ⅸ. *Programm. Über den Witz* シヤウシヤウ。
- ㉑ 前出。
- ㉒ *Aesthetic* シヤウシヤウ *Aesthetik* の シヤウシヤウ。
- ㉓ Earl Leslie Griggs, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, (Oxford, 1956), Vol. IV, p. 793.
- ㉔ Coleridge の「超自然 シヤウシヤウ」の論文 シヤウシヤウ 調査 シヤウシヤウ みたが、筆者には見出せなかつた。
- ㉕ Griggs, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, Vol. III, pp. 305—6.
- ㉖ *Ibid.*, Vol. III, p. 306.
- ㉗ Coleridge 氏 Jean Paul の *Palingenesien* シヤウシヤウ *Lectures on Shakespeare etc.* の中で Notes on the *Palingenesien* of Jean Paul (1818) と題して シヤウシヤウ の シヤウシヤウ 及び シヤウシヤウ。
- ㉘ Griggs, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, Vol. III, p. 306.
- ㉙ J. J. Richter 氏 Jean Paul Richter の シヤウシヤウ。
- ㉚ Griggs, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, Vol. III, p. 462.
- ㉛ Coleridge's *Shakespearean Criticism*, ed. T. M. Raysor, Everyman's Library, 1967, Vol. II, pp. 62—3.
- ㉜ *Ibid.*, p. 50.
- ㉝ Griggs, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, Vol. IV, p. 649.
- ㉞ Brandl's *Samuel Taylor Coleridge und die englische Romantik*, 1886, Lady Eastlake's English translation, p. 316.
- ㉟ Jean Paul Richter, *Vorschule der Aesthetik*, Hamburg, 1804, Vol. I, pp. 31—2.
- ㊱ 傍点 シヤウシヤウ は筆者。以下傍点 シヤウシヤウ は筆者。
- ㊲ *Biographia Literaria*, Vol. I, p. 202.
- ㊳ R. L. トムナー「空想 シヤウシヤウ」の想像力 シヤウシヤウ (研究社一九三一年) pp. 50—1.
- ㊴ *Biographia Literaria*, Vol. I, p. 226.
- ㊵ 「文学評伝 桂田利吉訳 脚注' p. 398.
- ㊶ *Ibid.*, p. 481.
- ㊷ 山川鴻三著「英文学に於ける シヤウシヤウ」の批評の伝説 シヤウシヤウ p. 16.
- ㊸ 拙稿「S. T. Coleridge の「想像力」と「空想力」との区別に与えた影響に シヤウシヤウ」を参照されたい。英文学試験 第二号 一九六九年。